


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

13歳からの地政学 ーカイゾクとの地球儀航海ー

田中 孝幸 著 ・ 東洋経済新報社

ISBN978-4-492-44468-9

1,500 円 + 税

一応物語風の体裁をとっているが、全くのフィクションではない。読者である中・高生向きに軟らかい語り口を装っている。登場人物は、大樹(だいき・高校 1 年生)、杏(あん・中学 1 年生・大樹の妹)、カイゾク(アンティークショップの店主・近所の子どもたちにその風貌からカイゾクと呼ばれている)。ある日、大樹と杏がこのアンティークショップで、素敵な地球儀を見かけ、店主・カイゾクから「地球儀を使って、世界がどのように動いているのか一緒に考えてみよう」と、7 日間のレッスンに誘われる。「地政学」とは、「政治現象と地理的条件との関係を研究する学問」(広辞苑)とのことである。

カイゾクの語り口は、誠に面白い。中・高生向けの本であるが、大人が読んでも非常に興味深い。新たに知ることがたくさん出てくる。

著者は、国際政治学者。

新聞記者として政治部、経済部、国際部、モスクワ特派員など 20 年以上のキャリアを積み、世界 40 カ国以上で政治経済から文化に至るまで幅広く取材した

(著者紹介)

とある。

さて、本書を読んで、驚いたことや新たに学んだことなどを紹介しよう。

<1日目のレッスン>

「物も情報も海を通る」

「排他的経済水域」に関連して、海の深さを絡めて海水の体積という考え方があるのは知らなかった。日本の近くにはたくさんの深海がある。世界で最も大きい「海水体積」を持っているのは、日本だという報告もあるという。(p.43)

また、

世界のほとんどのデータは海底を経由し(光ファイバーを束ねた海底ケーブル)、海の支配は情報をおさえることにつながる

(p.54)

というのも意外であった。私は実は、人工衛星かなと思っていた。インターネットのデータのやり取りの 99%は海底ケーブルによるのだそうだ。データが送られる速度は人工衛星よりも海底ケーブルのほうがずっと早いのだそうだ。

<2日目のレッスン>

「そばにひそむ海底核ミサイル」

この日のレッスンでは、核兵器についての話が出てくる。

核兵器は、いつまでももぐっているための原子力潜水艦、海の中からミサイルを発射する力、それに潜水艦を隠すための深く自分の縄張りにできる安全な海という3つを確保できて初めて最強のアイテムになる。

(p.64)

という。

最強のアイテムを完全な形で持っているのは、アメリカとロシアだという。

ロシアは、オホーツク海(水深 3000 メートル以上で深い。奥まった湾のようになっているロシア以外の潜水艦が入れない。)に原子力潜水艦をもぐらせている。

この話の続きで、中国が南シナ海を欲しがる理由が話される。中国は二つの条件は持っている。原子力潜水艦が隠れる海がない。黄海は水深 40 メートル程度でだめ。中国が原子力潜水艦を隠すためには南シナ海しかない。平均の深さは 1000 メートル、最も深いところは 5000 メートルの水深がある。中国が南シナ海にこだわるのは、こういう理由もあったのか。知らなかった。

海洋資源だけの問題ではなかったのだ。(今読んでいる「核兵器について、本音で話そう」(新潮新書)の中でも同様の指摘があった。驚いた。)

まだ 2 日目のレッスンまでしか紹介できないが、以下 7 日目まで、次々と興味深い事柄が語られる。もちろん、鵜呑みにする訳にはいかない。異論もあるだろう。しかし、帯の紹介文

今の日本にこそ求められている一冊！複雑な国際情勢が物語でやさしくわかる(杉山晋輔氏・前駐米大使)

(帯)

にもあるように貴重な著書である。

残念ながら 2022 年 3 月 10 日、第 1 刷発行で、ロシアのウクライナ侵攻についての直接の言及はない。また、台湾をめぐる米中対立の新たな局面の言及もない。

それだけ世界は激変しているとも言える。続編が待たれる。

(この原稿は、2022 年 9 月 10 日時点で書いた。)